特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）採択余話

生活デザイン学科　名誉教授　宮本教雄

平成 15 年春、文部科学省主催の「特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）」に生活デザイン学科が申請することになりました。学外組織と連携してきた様々な事業を洗い出し、学生教育への影響や効果を考察し、今後の発展構想を練りあげ、「デザインを通した地域との交流による教育」として申請書を仕上げたのは、締め切りの直前でした。

審査結果が気になり始めた 8 月中旬、1 週間後にヒアリングを実施するという通知が来ました。説明 20 分質疑応答 10 分、出席は 5 名まで、OHP 使用という条件でした。元気に溌剌と滑舌良く説明して、好印象を与えることが重要と考え、代表の私は序の 2 分、説明の 18 分は 4 名の若い先生に任せました。原稿や OHP の作成、配布資料の収集整理などの作業で、私の研究室はまるで合宿所のようになり、帰宅は連日深夜になりました。

ヒアリングは、審査の先生方が笑顔で迎えてくださり、和やかな雰囲気の中で始まりました。完璧な仕上がりの OHP を使用しての説明は、目論見通りに進行しました。質疑応答の最後に主査の女性の先生が「採択されても公立大学は支援金が受けられませんがよろしいですか？」と言われました。咄嗟に「名誉だけで結構です！」と答えてヒアリングは終了しました。

9 月中旬、研究室で後期の準備をしているところに、文部科学省から「採択が決まりました。プレス対応をよろしくお願いします。」と電話がありました。急いで皆に知らせようと５階と４階を駆け回りましたが、生憎出張と研修で誰もおらず、一人で拳を上げて喜びを噛みしめました。学長への報告は声が上擦り、快挙を慰労された時は涙目でした。翌日、プレス発表用の資料作成中には、新聞社からの取材で電話が鳴り続けました。その時の逆取材で、競争倍率 8.3 倍、公立短期大学では唯一の採択ということがわかりました。

この採択がご縁で、その後の特色 GP の審査員や申請書評価員を依頼され、前述の主査の先生とも一緒に審査業務を行いました。その先生は、かつて岐女短の良きライバルであった、名古屋市立女子短期大学にお務めの経験があり、本学の事を良くご存知でした。ある時「岐女短の採択はほぼ決まっていたのだけれど、ヒアリングでの宮本先生の“名誉だけで結構です！”というあの言葉で本決まりになったのよ。」と言われました。人のご縁や咄嗟の発言の影響など、振り返ってみると本当に不思議です。

この採択で嬉しかったことは、学外組織と連携して実施してきた様々な事業が、教育の専門家に特色ある大学教育と認められたこと、岐女短の生活デザイン学科が全国デビューを果たしたこと、翌年度に貰えた約 1,400 万円の支援金で、採択記念事業を企画実施できたこと、そして教育設備備品の充実が図れたことです。

この貴重な経験は、あの時の若い先生方のお陰と、今でも心から感謝しています。